ドイツ飲料業界の3者、AIカメラで空きリユース容器を数える実証実験を開始

Getränke Weidlichのドルトムント拠点で2027年7月に試験開始予定。ドイツのリユース容器流通網で在庫データの広範な活用を目指す。

2026年11月18日（水）



ドイツの飲料業界団体、フラウンホーファー研究機構の研究所、同国有数の醸造グループが連携し、飲料卸売業界における空のリユース容器の在庫をカメラと人工知能で把握する実証プロジェクトに取り組む。

11月17日火曜日に発表されたこの提携には、Pro Mehrweg、フラウンホーファー物流・マテリアルフロー研究所（Fraunhofer IML）、Radeberger Groupが参加する。各団体は、助成プロジェクト「EmpInVision」の一環として、Getränke Weidlichのドルトムント拠点で空容器の在庫を自動記録するシステムを試験する計画だ。

発表によると、ドルトムント拠点には、リユース容器を自動で識別・計数するカメラベースの技術

を導入する。実証試験は2027年7月に始まる予定。

この取り組みの目的は、コンピュータービジョンを使って空のリユース容器の在庫を把握し、その情報をリユース容器システムの他の関係者も利用できるようにすることだ。参加各社は、システムの垣根を越えて空容器のデータに広くアクセスできれば、飲料容器の回収・再利用ネットワークの業務改善につながる可能性があるとしている。

ドイツの飲料業界では、リユース瓶やクレートが、醸造会社、清涼飲料メーカー、卸売業者、小売業者などを含む複雑な流通網を行き来する。在庫が手作業で更新されたり、情報共有にばらつきがあったりすると、こうした資産を正確に追跡するのは難しい。実証が計画どおりに進めば、物流の非効率を減らし、飲料メーカーや卸売業者が必要な容器の所在を把握しやすくなる可能性がある。これは、リユース容器で販売されるビール、水、清涼飲料などの供給にも影響し得る課題だ。

発表によると、このプロジェクトはDATIの試験的助成プログラムおよび支援クラスター「MEHRCE」のもと、ドイツ連邦研究・技術・宇宙省の資金援助を受けている。プロジェクトの予算規模や、画像の処理方法、最初に認識対象とするリユース容器の種類、参加企業間でのデータ共有方法など、技術的な詳細は明らかにされていない。

Fraunhofer　IMLは物流とマテリアルフロー分野でドイツを代表する応用研究機関の一つで、Radeberger Groupは同国の醸造業界を代表する大手企業だ。Pro Mehrwegはリユース容器の利益を代表する団体である。今回の連携は、多くの現場で依然として労働集約的な飲料物流の一部をデジタル化する動きを示している。

発表で明らかにされた初の実地試験は、ドルトムントのGetränke Weidlichで行われる予定だ。参加各社は、2027年7月の開始後に試験をどれほどの期間続けるのか、また結果をいつ評価するのかを明らかにしていない。他の卸売拠点への技術展開や、既存の在庫・倉庫管理システムとの連携が可能かどうかについても説明はなかった。

それでも、このプロジェクトは、倉庫や物流業務でマシンビジョンとAIを活用するという、飲料業界全体のより大きな潮流を示している。容器が絶えず循環し、不足が配送に支障をきたしかねないリユース容器の事業では、技術が大規模運用でも信頼性を発揮すれば、より精度の高い在庫データが実務上の強みとなる可能性がある。